

令和6年度(第46回)

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



はじめに

昭和54年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々に支えられ、今年で46回目を迎えることができました。

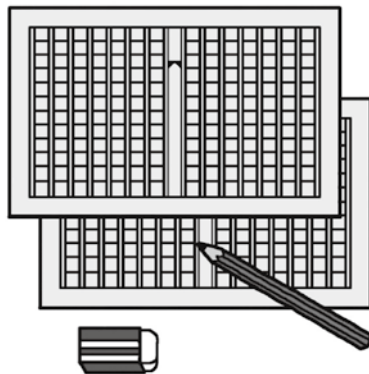
この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

今年の大会は、台風接近の影響で主張発表動画の審査による開催となりましたが、加賀地区、金沢市地区、石川中央地区、能登地区の4地区から選ばれた16名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、視聴した皆様に大きな感動を与えました。

この記録集は、その16名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。

終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様に厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



も く じ

◆はじめに

◆大会発表作品

最優秀賞

海を越えた架け橋 金沢市立長町中学校 2年 北野 はな …… 3

優 秀 賞

光と影との共存 加賀市立東和中学校 3年 中出 愛梨 …… 4

僕の挑戦 金沢市立長田中学校 3年 長濱 智斗 …… 5

奨 励 賞

地震との向き合い方 加賀市立片山津中学校 3年 小酒 愛菜 …… 6

集団の中での個人の力 小松市立芦城中学校 3年 瀧坂 朔矢 …… 7

「明日」に向かって 能美市立寺井中学校 3年 上田 久遠 …… 8

2020年12月1日 白山市立松任中学校 3年 カキ スバナ …… 9

当たり前ではない日常 野々市市立野々市中学校 3年 皆田 果凛 …… 10

“今日を生きる君へ” 金沢市立高岡中学校 3年 村本 詩歩 …… 11

行動することの意味 金沢市立西南部中学校 3年 中野 瑛斗 …… 12

後悔しないために。「今」できること 津幡町立津幡南中学校 3年 谷口 歩 …… 13

ありのままの自分 かほく市立高松中学校 3年 大多 遼 …… 14

日常という名の幸せ 中能登町立中能登中学校 3年 笠間 絵吏 …… 15

「普通」が阻む、「特別」な自分 中能登町立中能登中学校 2年 瀧口 蒼太 …… 16

言葉に込めた気持ち 七尾市立七尾東部中学校 3年 金村 美羽 …… 17

自分らしさ 七尾市立七尾東部中学校 3年 村本 大我 …… 18

(優秀賞、奨励賞は石川県中学校一覧の順に掲載)

◆審査委員講評 …… 19

石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長 東原 修身

◆少年の主張石川県大会概要 …… 20

◆石川県大会審査基準 …… 21

◆地区大会概要 …… 22

◆第46回少年の主張全国大会 ～わたしの主張2024～ 内閣総理大臣賞受賞作品 …… 26



「アンニョン」「コマウォ」「ミアンヘ」といった多くの韓国語が飛び交う家庭で私は育ちました。私の母は韓国人です。これまで、外国人差別や韓国に対する偏見に自分を重ねて見られることが怖かったため、母が外国人であることをあまり話してきませんでした。しかし、この作文をきっかけに差別に苦しむ人々について多くの人に考えて欲しいと思い、ここに私の母のことを記そうと思います。

私の母は今まで、日本で仕事を探すにあたって大変苦労してきました。母によると、どれだけ日本語がうまくてもどれだけその仕事の経験があっても、外国人というだけで望む仕事に就けないというのです。母は留学生として来日し日本の大学を卒業してから、もう二十年以上日本で暮らしているため、日本語は相当上手な方です。初対面の人は、私の母が外国人だなんて露ほども思わないでしょう。また、母は日本で様々なアルバイトをしてきたため、従業員として働いたり料理をつくったり、色々なことができます。しかし、それでもアルバイトに応募したとき、電話口で苗字を言った瞬間に相手の態度が急変し、断られるといった失礼な対応をされたことがしばしばあるそうです。あるときは「求人情報誌には確かに載っているけど、もう募集はしていないんです」とあからさまな嘘を言われたり、「あなたどうせ日本語話せないでしょう笑」と勝手に決めつけられて侮辱されたりすることもあったそうです。それを聞き、私はとても悔しい気持ちになりました。中身を全く見てくれないのです。母は日々日本語を勉強しており、仕事においても休日に家で料理の練習をしたり仕事内容を復習したり、努力しています。そのような母の努力を見もせず、聞きもせず、ただ苗字を聞くだけで断られてしまうことにショックを受けました。人の中身を見ず、偏見でこんな人だと決めつけてしまう。これが差別なのか……と気づき心が締めつけられる思いでした。

当然、差別は人の心を深く傷つけてしまう、絶対にしてはいけない行為です。しかし考えてみると、先程のアルバイト先の相手も、外国人だからという

だけで断ったのには理由があるのかも知れません。もしかすると、今まで雇った外国人が、その仕事に必要な日本語力や技術が足りなかったといったことがあり、その経験からもう外国人を雇うのはやめようと考えたのかも知れません。もしその人が、母の日本語力を認めてくれ、仕事もひたむきに取り組む人だと分かっていたら、このような態度ではなかったのではないのでしょうか。

つまり差別とは、相手のことを知らないから、知ろうとしないから起こってしまうのでしょうか。

また、差別の原因には人々を自分勝手に分類して考えてしまう、といったことがあると思います。アルバイトの電話口での相手は母を「外国人」というカテゴリーに分類して思い込みを強めてしまったのかもしれない。私たちはこれらのことを無意識にやりがちです。例えばこの人は女性だ、外国人だ、年齢がいくつだ、学歴が何々だ、職業が何々だ……と。このように相手を勝手に分類してよく知りもしないのに判断してしまうことは意識しなければなかなか改善できません。

そのため、差別のない世界を目指すには、相手のことを知ること、そして自分のことを伝えていくことが最も大切だと思います。相手を何かのカテゴリーに分類して「この人はこうだろう」と決めつけるのではなく、一人ひとりの人間として、よく見て、よく知ることが必要なのです。

私は韓国人と日本人のハーフです。ハーフである私の役割は、正しい情報を伝える両国のパイプになることだと考えています。誰もが正しい情報を知ることができるのなら、差別は少しずつ無くなっていくだろうと信じ、海を越えた架け橋になりたいです。そのために私は今韓国語を勉強しており、将来は韓国へ留学したいと思っています。みなさんも、自分ができること、そして自分がすべきことは何か考えてみてください。差別も、偏見もない、誰もが快くのびのびと過ごせる世界の実現を願って。



「主人公メロスの、友人への強い思いが印象に残りました。竹馬の友セリヌンティウスを救うために、走り続けたメロス。その行動は、真の友情とは何かを教えてくださいました。現代では、自分の利益や安全を優先しがちですが、メロスのように、他者を第一に考え行動する姿勢は見習うべきものです。」これは、誰もが知っている「走れメロス」。その夏休みの読書感想文の一部です。でも、実はこれ、「心」を持たない、A Iによって作られたものなのです。

読書感想文は、大抵最後まで残る重い宿題です。それをA Iは、即座に仕上げてくれます。本当に便利な世の中になりました。と、本当に言っているのでしょうか。

私は、小学生の頃から薬剤師になることが夢でしたが、その将来の夢について語っていたとき、友人からこう告げられました。「薬剤師って、将来A Iに仕事を奪われるらしいよ。」と。「奪われる？何で？」、私は混乱しました。ある日新聞に、「日本の労働人口の約49%の仕事が、近い将来、A Iによってなくなる。」と書かれた記事を見かけたことで、友人の言葉は真実味を増しました。それまでただ便利な物としか考えていなかった私が、A Iに真剣に向き合うようになった瞬間です。

膨大なデータを瞬時に処理し、これまで人間が行っていた作業を、100%と言える正確性で遂行してくれるA I。3 Kと言われる作業にも抵抗なく従事してくれるA I。近頃では、多くの店舗で受付や料理等を運ぶA Iロボットの姿まで見られます。何から何までいいことづくめのように思えますが、人間の甘えを生み、将来の夢までも奪う、いわば両刃の剣の性質もA Iは持っているのです。しかし今の世の中、もはやA I無しには成り立たなくなっているのも事実です。ではこの先、どうA Iと向き合っていけばいいのでしょうか。

人類が地球上に出現して数百万年。火を扱い、道具で道具を作れるようになった人類は、産業革命において飛躍的な進歩を遂げました。と当時に、「職

業」の形も大きく変化をしてきたはずですが。新しい機械や制度ができる度に人々は、必死に「考え」、「工夫し」、生き残りのための改革を進めてきたに違いありません。そして現代。A Iは、日々進歩を続けています。であるなら、それを生み出し扱う私たちも、その発展に合わせて、いやそれ以上に進化をしていく必要があるのではないのでしょうか。

哲学者パスカルは、「人間は、葦のように弱い存在である。しかし、考えることができる葦である。」と言いました。豊かな思考力を用いて困難を克服し、新しい物事を創り出してきた人間が、もし、全てをA Iに頼りきり、考えることを放棄してしまったら、それこそただの、細く弱い葦のような存在になってしまいます。

万能のように思えるA Iですが、小説の内容と、自分の経験とを照らし合わせ、どんな影響を受け、どう自分が変化したかを述べた感想文は書けません。また、症状に合わせた薬の調合はできても、複雑な事情を持つ患者の、細やかな気持ちに沿った薬の調合はできません。しかし、人間には、「心」を原動力に、状況に応じ柔軟に考え、変化させる力があります。だからこそ私たちは、自分の力で表現することを放棄してはいけなく、たとえ働き方は変化しても、仕事への情熱は決して失ってはいけなくのです。

A Iは、その光と影を正しく認識し、上手に活用さえすれば、人間にとって大きな力となり、利益をもたらします。しかし、「考えない葦」となってしまった人類が、A Iによって支配されるS F映画のような未来になっていいのでしょうか。この最新技術と共存していくためにも、共に考えましょう。私たちは人間、「考える葦」なのですから。



人の前に立つ。この中学校三年間の中で生徒会長や野球部の主将、運動会の応援団長と、リーダー的な立場で人前に立つ機会が何度もありました。周りや先生方から推薦していただくだけでなく「やりたい！」と自ら立候補もしました。友達からは自分に自信があるんだろうと思われるかもしれません。でもこれは自信ではなく、僕の「挑戦」なのです。

僕は心室中隔欠損症と大動脈離断症という二つの先天性の心臓病をもって生まれてきました。心臓の右心室と左心室の間の壁に穴が空いているのに加えて、大動脈の一部が完全に途切れ、下半身への血の流れが途絶えてしまう病気です。幸いにも、生まれる前、母のお腹の中で僕の病気が発見されたため、生まれてすぐに治療を始め、小学校低学年頃までに八回程の入院や手術を経て、今こうして元気に過ごすことができています。

しかし、体には大きな傷もあり、これからも続く通院や治療に大きな不安はずっとありました。小学3年の頃、母の勧めで始めた少年野球。これまで無理をしないということが当たり前だったため、練習についていけないことがたくさんありました。「病気じゃなかったらもっと出来るのに」と何度思ったことか。一方で出来なくても仕方ないと諦めていた自分もいました。

そんな僕が変わるきっかけとなったのは、コロナ禍での出来事でした。「走る練習しよう」と、家で暇だった僕に父が言ったのです。それまでの僕は運動会の徒競走は常に五位か六位。運動も特に好きではありませんでした。父が勧めるメニューを嫌々ながらも続けるうちに少しずつ「速く走れるようになりたい。続けたら変わるかも。」と胸のずっと奥の方に秘めていた希望が、頑張る原動力となってきたのです。それから半年ほど経ち迎えた運動会。徒競走で一位のゴールテープを切ったのは、自分だったのです。想像もしなかった驚き、それにも勝る今までに味わったことのない大きな喜びと、見たことのない光景。家族の輝く笑顔。あの瞬間は今でもしっかり覚えています。僕の中の可能性を信じ、背

中を押してくれた家族の存在が自分を大きく変えてくれました。

僕は決して、病気が原因で苦しい思いをしたということや伝えたいわけではありません。病気だから仕方がないと自分のなかに制限を設けてしまうのではなく、「出来るかも」「やってみようかな」と小さな一歩踏み出すことが出来れば、新たな大きな可能性を見つけることができる、ということや伝えたいのです。

この経験から学んだことが二つあります。一つは「挑戦し続けること」です。続けることは、いつか「自信」になると思います。上手くいかなかったとしても、その過程で得たものは必ずこれからの自分を支えてくれるはずです。

そして二つ目は、「一人じゃない」ということです。僕自身、一緒に闘う仲間、支えてくれる、応援してくれる人がいるから頑張れているのです。あの時から続けている野球でも、学校生活の中でもその大切さを常にかけています。だから僕は次の目標に向かってみんなの前に立って「挑戦」できるのです。

僕は将来、自分と同じように、病気や何かに悩む子どもたちを支えられる職業につきたいと思っています。毎日薬を飲み、一生病気と向き合っていけないといけな自分どんな事ができるのか、正直まだ分かりません。

でもひとりではない。自分のハンディキャップを言い訳にせず、可能性を信じて挑戦していきます。生まれる前から多くの人に支えられて、今を元気に生きられていることを忘れずに、これから先も支えてくれる人たちに感謝して、前に前に進んで行きます。そして僕も仲間たちと一緒に、たくさんの人の役にたきたいと思っています。



令和6年1月1日午後4時10分に能登半島を中心とした最大震度七の大地震が発生しました。あの地震が起こったとき私は大丈夫だと思い、直ぐに行動することはありませんでした。しかし、徐々に大きくなっていく地震に恐怖を覚え、その後すぐに速報が入っていました。

この大地震という経験を経て、私は1つ気づいたことがあります。それは、私達日本人は地震に慣れすぎていたのかもしれないということです。日本は地震大国だから地震の怖さはよく知っているはずですが、しかし地震の怖さを知っているならもっと違う行動を起こせたのかもしれないとも思うのです。地震という大きな自然災害に私達はどの向き合っていけばよいのでしょうか。

私たち片山津中学校3年生は、修学旅行で兵庫県を訪れ、阪神・淡路大震災を通した防災学習を行いました。震災の資料がある「人と防災未来センター」では、震災の追体験ができるシアターで映像を見ました。シアター内に響き渡る轟音。崩れ落ちていく建物。形を変える道路。突如訪れた大きな地震で建物や線路が一気に崩れていく様子を見ました。もしあの場に自分がいたら。そう考えるだけで怖くてたまりませんでした。資料を見て回ると今まで想像していた状況をはるかに超えていて、地震を体験した方たちの辛さがとても伝わりました。

また、学習の一環として、ふたば学舎で避難所での生活を体験しました。実際に阪神・淡路大震災のときに避難所になった施設で、ダンボールで仕切ったスペースをつくりました。4人での生活を想定しましたが、ダンボールで仕切ったスペースはとても狭く、避難所での生活はとても大変なものだと感じました。プライベートな空間はなく、気持ちが休まらないと感じました。

1月1日に起こった「能登半島地震」から約半年が経ちました。半年が経った今もなお、避難生活を

余儀なくされている人たちがたくさんいます。しかも、街の復興は少しずつしか進んでいないのが現状です。ですが、「元の町に住みたい」という人たちが半分を超えるそうです。私は修学旅行の防災学習で、災害時は人との協力がどれだけ大事かを学ぶことができました。避難するときも、避難所生活で苦しいときも、苦しい現状をそのままにするのではなく試行錯誤していきながらその時にできる最善を尽くし、少しずつ前進していくことが大切だと学びました。

地震をなくすことはできませんが、毎日の備えによって防ぐことはできます。家具の固定や防災バックの準備、また、家族みんなで避難する場所の確認などが「備え」だと思います。また、気持ちの面での「備え」も重要だと思います。大地震が「今日来るかもしれない」。頭のどこかでそう考えておけばいざとなったときのために命を守ることができ、大切な人の命も守ることができます。

「地震を知って、地震に備える」これが私の思う地震との向き合い方だと思います。また「地震に遭った人たち、町を忘れないこと」今の私には直接的な支援はできないけれどこのことをたくさんの人たちに伝えていきたいです。



「ONE FOR ALL ALL FOR ONE」

この言葉の前半部分には、一人一人が集団のために自分の役割に責任をもって取り組んでいくことが大事なのだ、という意味があると私は思います。

今年の四月、クラスで話し合っって学級目標を決めました。そのとき私は学級会副会長として、進行を任されていました。しかし、皆が恥ずかしがって、意見が出ずに進行が滞ってしまうのではと不安に思っていました。ところが話し合いが始まってしばらくすると、クラスの仲間の一人が、「意見出すために考える時間五分ちょうだい。」すっと手を挙げて提案してくれました。その提案通り少し考える時間をとると、そのあとはどんどん意見が出てきて学級目標決めは思っていたよりもスムーズに進んでいきました。

最初に手を挙げて提案してくれた仲間の行動からは、皆で成長していくために何が必要かを考え、集団のためになる行動をしようという思いが見えました。そして、その些細な行動から実際にクラス全体がよい方向に進んでいく様子を見て、小さなことでも行動してみることが大事だと感じました。

また、この話し合いで意見がたくさん出た後、皆の思いを無駄にしないような工夫をクラス全体で考えていました。「消去法で意見を絞ろう」ではなく、「意見を一つに統合していこう」という意識が皆の間で芽生えていたからだと思います。こうすれば、一つの目標に向かって皆が努力することができず。それがきっと集団としての強みになっていくはずです。

いっぽう、このような意識がない行動をしてしまった場合どうなるでしょう。私が小学生のとき、お楽しみ会の内容をクラスで決めたことがありました。そのとき、皆自分がしたいことを話すだけで意見がまとまらず、ちっとも話し合いが進みませんでした。結局、その時点で出ていた意見から、半ば強引に多数決で内容を決めました。しかし、その結果を一向に認めない人がいて、多数決は覆されてしまいました。当然このことに納得できない人もいまし

た。その人に対して、「俺が絶対正しい。なんでそんなこともわからんの。」と心無い言葉で相手を傷つける、ということがありました。

自分勝手な行動をしてしまうと全体の話合いが進みません。それがエスカレートすると、暴言を吐いてしまうような、他人を否定する行動につながってしまうのです。彼らがこのような行動をとってしまったのは、自分のことしか考えておらず、視野が狭かったり、偏った考えになったりしていたからではないかと思うのです。自分勝手な行動をすることは、周りの人や集団について考えることを放棄しているのと同じです。それではよい集団として成長することはありません。

一つの集団として成長するためには、自分勝手な行動をせず、周りのことを考えて行動することが大切です。ただし、周りを見て行動するとは、周りの人の意見をなんでも受け入れて自分の意見を言わないということではありません。むしろ、自分の意見をちゃんと伝えること、そして他人の考えを否定しない広い視野と心をもつことが重要です。

集団の中の個人の力は微々たるものというイメージをもっている人は少なくないと思います。しかし、たった一人の些細な行動が、実は良くも悪くも周りに大きな影響を与えていくのだと、これらの経験から感じました。

自分の影響力をどう使うかは自分次第です。もし、自分や仲間、そして集団の成長を願うのであれば、組織の一員であることを自覚して、自分のすべき役割を探し出してみてください。それが難しいという人がいたら、まずは自分を見つめ、得意なことやできそうなことを分析しましょう。そして、それを生かせる場面が見つかったら、実際の行動に移してみませんか。あのとき、「考える時間五分ちょうだい。」といった仲間のように。



皆さんにとって「当たり前の日」とはどんなものですか。私の当たり前の日とは、このようにはじまります。

朝、目を覚まします。学校に行き、友達に挨拶し、授業を受けます。学校が終わって家に帰り、自由な時間を過ごします。夕食を食べ、風呂に入り、ベッドで目を閉じます。目を開けるとまた、「明日」がやってきます。

多くの人も同じような一日を思い浮かべるでしょう。しかし、「明日」がやってくることは、本当に、当たり前なのでしょうか。実は、戦争は今の私たちにも無関係なことではないのです。

現代の日本も北朝鮮からのミサイルのニュースが流れることがあります。台湾有事など、アメリカと中国の関係など日本が関わる国々の関係によっていつ戦争に巻き込まれるのかわからないのです。

戦争で多くの人たちが亡くなり、多くの人たちが家族や友達など大切な誰かや、当たり前生活を失いました。争いが起これば、友達や家族と話す日々が当たり前から当たり前ではなくなってしまいます。だからこそ、今、当たり前の日々を大切に生きることが大事なのです。

私は、修学旅行でピース大阪に行ってきたことで、そう考えるようになりました。ピース大阪にはどれも残酷な資料がずらりと並んでいました。

その中で私の目に最も留まったのは、「出征する兵士」というエリアでした。そこにはこれから出征する兵士が妻や子供へ書いた手紙があり、万が一のことがあればこれから生まれてくる子のことを託す、というまるで遺言のような内容でした。このとき私はこの人たちには「未来」がないと感じました。戦時下の人たちは常に死と隣り合わせの生活をしており、兵士ならなおさら死ぬ確率が高い、そんな中でこの人たちは生きている。この手紙からは立ち向かう兵士の強い覚悟が感じられました。同時にそんな覚悟を強制する戦争の恐ろしさを改めて実感しました。私がこの兵士と同じ立場だったら生きる気力をなくしかねません。この手紙を残した多くの人が

亡くなったという現実を受け入れることさえも困難で、戦争は二度と起してはならないと感じました。

また、大阪大空襲を体験した方の証言や様々な資料から、あまりにもつらい状況を知り、明日のことなど考えられない生活がどのようなものだったのか、その残酷さを目の当たりにし、想像もつきませんでした。

しかし、現代でもニュースでは連日悲惨な映像が流れています。日本だけは安全だ、とは決して言えないはずです。明日は必ずやってくるとは言えないし、今当たり前の存在となっている家族や友人だって明日にはいないのかもしれない。そう思うと余計、学校や友達、家族との生活といった当たり前の日々の大切さを痛感します。

だから、この日々を守るために、私は、相手の現状を理解し、相手にも私達の現状を理解してもらい、互いに助け合う国際協調の姿勢を貫くことが大切だと考えます。寺井中学校では、今年から対面での交流が再開される、韓国の大徳中学校との交流事業にも学校全体で関わってきました。

オンライン交流で環境問題について一緒に考えたり、実際に会って共に一つのことに感動したりしているうちに、やはり、お互いを知る、ということが、世界平和への第一歩なのだと感じました。

「人類は戦争に終止符を打たなければならない。さもなければ、戦争が人類に終止符を打つことになるだろう」アメリカ合衆国第三十五代大統領ジョン・F・ケネディは言います。戦争が起きれば多くの人が犠牲となり死体の山が築かれる。私たち人類は、これまでの歴史でさまざまな争いを経験してきました。その争いをすると、人の命や文化など、失っていくものは数え切れません。私はこれまで戦争で亡くなってしまった人々が一番求めていたのは「明日」だったのではないかと考えます。

良い戦争なんてものは存在しません。大切なのは、今ある平和に感謝し、日々を大切に生きることなのです。



私はネパール人です。日本に来て三年半たちました。

「今の私は、みなさんからどんな風に見えていますか？」この質問はみなさんに聞きたいです。

「子供時代、何も知らない新しい国、新しいところ、新しい文化と新しい学校生活、どのぐらい辛いか考えたことがありますか？」この質問はわたしと同じぐらいの年の子に聞きたいです。

私は日本に来てどんな気持ちになったのか、今日皆さんに伝えていきたいと思います。

2020年12月1日。初めて日本の小学校に通うことになりました。(わあ、テレビがある。座る椅子も違う。みんな白人だ。) 私にとってはすべて知らない初めてのことばかりでした。だから、そのときは母を抱きしめて泣きたいぐらい緊張をしていました。でも、そのあとクラスメイトと自己紹介ゲームをし、その一日を楽しんで終わらすことができました。

日本の小学校はネパールと違って、一人一人が持っているランドセルがあり、掃除があり、また教科ではネパールにない図工、体育、家庭、音楽の新しい教科を学ぶこともできます。でも私はそのような授業を受けず、代わりに日本語の勉強をしなければならなかったのです。(嫌だな。私も図工をしたい。友達を作りたい。) と思っていました。

だんだん日本語が分かるようになって行くと、音楽や体育の授業を受けることができました。しかし、音楽ではリコーダーやキーボードが全く初めてで使えない状態だったので、私は毎日家に持ち帰り、練習することにしました。すると、先生に褒められました。「あなたは本当にうまくなったな。」と。私は、そのあと三ヶ月間、ずっと勉強を頑張りました。授業で黒板に書いてあることは、全く理解できていないのに、ひらがなやカタカナが動いたり、漢字は絵のように見えたりして、覚えていくことは面白かったです。しかし、ある日具合が悪くなり、吐ききたくなったのです。でも簡単な日本語しか喋れない。どうしよう。私は自分の気持ちをうまく日本語

で伝えることができませんでした。数分たっても、やばい、出てきてしまう。先生に伝えよう。やっぱりいいや。いろいろな思いが頭の中で回っていました。結局、先生に自分の気持ちを伝えないまま、手洗い場で吐いてしまいました。そのようなことは、私の日本の生活ではいっぱいありました。例えば、自分はいじめられているのに、それがいじめだとは自分はわからない。それよりひどいことは、わたしの肌の色で差別されたことです。私はヒンドゥ教です。牛肉がダメで、学校で牛肉が出る日はお弁当を持っていきましたが、私のお弁当が臭いと言われ、窓を開けたりもされました。皆さんならこのようなことが起きたらストレスが溜まりませんか。辛いと感じませんか。でも、わたしは全くそんなことは感じませんでした。その代わり、その辛さを楽しみに変えました。今でもそうです。わたしは毎日何かを頑張らないと、その一日を楽しむことができません。それは私が日本で生活してきた中で経験したことです。この経験をして、私は自分を強くすることができたのです。でも世界ではそんなことを経験してもっと弱くなる人もいます。ひどいことを言われると、鬱病になり自殺する人もいます。多分、誰も自分の母国以外の国へ行行って、生活したいと思わないと思います。だから皆さんにお願いがあります。多くの外国人が日本に入ってきて、日本社会の中で一員になろうと頑張っていると思います。これからもっと増えて行くと思います。だから、日本に来ている外国人に日本の良い文化を教えてほしいです。異なる国の人々だからと差別しないでください。

最後に、言いたいこと。それは、世界は広いです。その中で、多国籍、いろんな文化、いろんな肌色の人、いろんな人々がいます。でも、流れる血の色も、痛さや辛さを感じられるのはみんな同じです。だから国籍で差別する必要があるんでしょうか？肌の色で差別する必要があるんでしょうか？



皆さんは何気ない日常に感謝できていますか？毎日食べている温かいご飯、学校に行けること、いろんな人や友達との何気ない会話で笑えていること、ベッドでぐっすり眠れること、住む家があること、電気やきれいな水道、ガスが使えること。そして今までもこれからも私たちを支えてくれる家族がいるということ。家族の他にも、私たちは様々な人に支えられながら生活しています。しかし、日常生活に感謝することを少し忘れがちになっているのではないのでしょうか。

私も住む家があり、毎日おいしいご飯をたくさん食べられることを当たり前だと思っていました。しかし私はある経験を通して、「日常生活は当たり前なことではない。」「日々の生活を支えてくれる人や一つ一つの行いに感謝しなくてはいけない。」と思ったのです。

今年の一月一日。私は例年通り、輪島の祖母の家に帰省していました。久しぶりに集まった親戚の皆でゲームをしたり、ゆっくりくつろいだり、ご飯を食べながらそれぞれの話をして、笑い合ってお正月を楽しんでいました。しかし、午後四時頃、私が姉といとこと犬の散歩をしていた時でした。「カタカタカタ」と軽く地面が揺れました。そして「緊急地震速報、大地震です。」と、地域のアナウンスが流れました。私たちは最初の揺れに「怖い」と感じながらも、「もう来ないだろう。」と思っていました。しかし、その四分後、スマホから鳴る地震の警報とともに目の前にあった祖母の家や周りの地面が「ガタガタガタ」と大きな音をたて、震度七の揺れが私たちを襲いました。立つこともできないほどの巨大な揺れ、大きな音と砂ぼこりを立てて崩れていく近所の家が私の記憶に鮮明に残っています。すぐに家から皆が出てきて、「大丈夫か、大丈夫か。」と声をかけ合いました。家がめちゃくちゃになって泣いている人もいました。また、家が壊れ、その家の下敷きになっている高齢者を父や親戚、近所の人たちが助け出していました。道路もほとんどが地割れしており、避難所までの五百メートルの道のりもやっと

のことでした。

その時私は「しばらく家には帰れないかもしれない。」「早く友達に会って安心したい。」と強く思いました。電波もなかったため、誰にも連絡できず、ラジオの少ない情報を頼りに、ずっと恐怖に耐えていました。避難所に着いた時にはすでに空は暗く、室内でもとても寒く、電気は自家発電でつけたライトだけでした。水が使えないため、トイレは近くの川の水をくんでしのぎました。食料は施設にあったわずかなクッキーやおせんべいしかなく、皆お腹をすかせて食べ物が出るのを待っていました。本震が来た後も何度も予震が来ていたため、いつまた大きい揺れがくるかわからない恐怖で夜もなかなか眠れず、不安でいっぱいでした。しかし、お互いに声をかけ合って夜が明けるのを待ちました。

外に出てみると、輪島の朝市の方角が真っ赤でした。家が焼け、亡くなった人もいました。元旦のめでたさで浮かれていた気持ちが突然失われました。多くの人の中で一生に残る出来事となりました。しかし、そんな中でも様々な県から応援に来てくれる自衛隊や消防士、ボランティアの方々を見ました。心の大きな支えになりました。

このような経験から、私は毎日当たり前に過ごしている時間が、どれだけ幸せなことだったのか、と知ることとなりました。また、自衛隊やボランティアの方々、地域の人や家族、親戚、多くの人が支えてくれることも知りました。そしてこれまでの生活がどれだけありがたいことなのかを学びました。今回の経験を通して、人はどんな困難があっても、協力し、支え合い、お互い感謝しなければならないと強く感じました。

皆さんも今の生活を当たり前だと思わず、一日一日を大切に過ごすことを意識してみてもはどうでしょうか。私は、何気ない日常を過ごせること、その生活を支えてくれているたくさんの人に感謝して生きていきたいです。



皆さんは、コンプレックスがありますか？私は、十歳の誕生日まで、自分の生まれたときの身長や体重がコンプレックスでした。私がこのコンプレックスを持つようになったのは、小学二年生の学活の授業でのことでした。

自分の生まれたときの身長や体重について調べて、まとめていた時のことです。ある男の子が私の書いている紙を見て、「“普通”の人とは違うね。」や、「小ささ。」と言い、からかってきました。今の私からは想像できないでしょうが、私の生まれたときの身長は、父の両手にすっぽりとおさまる程小さく、29センチ程度で、体重は、平均の2,500グラムを大いに下回る569グラムでした。

男の子の言葉に私は、他の人たちと同じではないことにショックを受け、その場で泣いてしまいました。普通で平均的な体で生まれてくれればよかったのか、私はどうして小さく生まれたのか、などたくさんのことを考えました。

そんな想いを抱えたまま時が経って、小学四年生の十歳の誕生日となりました。当日の朝、両親は私に一冊の本のようなものを渡してきました。タイトルのない表紙をめくり、中身を見てみると、自分の生まれたときからの成長記録や、両親などたくさんの人からのメッセージが書かれていました。そして、最後のほうに、

“小さく生まれてきた君へ”というタイトルがあり、病院のスタッフさんからの力強いメッセージが書かれていたのです。“君は、その小さな手のひらに「希望」を持っているし、「未来を生きる力」も持っている。私たち大人は、世の中で小さく生まれてきた、そんな君たちのために何かをしたいんだ。お父さんやお母さんは眠れないくらい心配してくれる。病院の先生は、小さな君が上手に生きていけるように手助けをしてくれる。小さな君が必死に生きているその姿が、私たち大人に、感動と、生きることとはどういうことなのかを教えてくれたんだよ。だから君もずっとたくましく生きていってほしいんだ。”

全てを読み終えたときには、涙が止まらなくなりました。体中の水分が抜けそうなほどでした。そんな私に両親は、「生まれてきてくれてありがとう。」と言ってくれました。毎年言われているお決まりの言葉が、その日は心の底から嬉しいと思えたと、とてもあたたかく、優しい感じがしました。

私は、生まれてきてよかった、小さく生まれてきたのはそれほど早く親に会いたかったからなんだ、と思いました。小さく生まれたことは自分しか持っていない個性であること、私たちの命は、奇跡的に生まれ、誰かによって生かされ、支えられていて、一人ではない今日を生きていることに気付くことができました。

ここ数年の間に、新型コロナウイルスの流行や、能登半島地震がありました。被害は大きく、たくさんの人が苦しみました。いえ、今も苦しんでいる人もいます。私たちは、日々自分のことに精一杯で、“当たり前”を失ってから、「命の尊さ」や「生きること」の意味について気付くのかもしれません。

「今日」を生きる私たちは、毎日いろいろな悩みを抱えながら生きています。コンプレックスや、思うようにいかないことに嫌になったり、逃げ出してしまうようになったりすることもあるでしょう。でも、私たちの周りには、支えてくれる人たちがたくさんいます。その支えを信じながら、「未来を生きる」私たちは、奇跡的に生まれた「命」、それぞれの個性を大切にしていける必要がある。私は今、こう思っています。



不幸かどうかを決めるのは、結局のところ自分自身だとは思いませんか。

僕には、小学校から付き合いのある友達しかいません。中一、中二のクラスには、友達と言える人がいました。しかし、今年の四月、クラス発表の名簿にその友達の名前はありませんでした。何かの間違いではないかと思い、何度も名簿を見返しました。僕は一人ぼっちでした。「どうして」という疑問と「どうしよう」という戸惑いが頭の中に渦巻いていました。

一人で抱えていることができず、このことを両親に相談しました。結論は、「勉強に集中すればいい。」でした。自分の殻に籠って、ただ時間が過ぎるのを待つ一年間を想像しました。休み時間、楽しみに話すクラスメイトの横で、誰とも関わらず一人で本を読み、黙々と勉強する自分を。どうしようもないからと諦めてしまうのは嫌でした。また、このまま過ごすことこそ、「不幸」だと思いました。両親に相談したことで、このままで終わりたいくないという自分の気持ちに気づくことができました。先のことはわからないけれど、どうせ友達がいらないのなら、興味のあることをやってみようと思いました。このとき、二年前の合唱コンクールでの経験が僕の背中を押してくれました。

僕は、一年生の合唱コンクールで指揮者を務めました。しかし、初めは指揮者という役割に興味はあったものの、立候補する勇気がありませんでした。何らかの役割がほしかった僕は、キーボードの運搬係を希望しました。合唱コンクールの係決めのアンケートに、どのような思いで合唱コンクールに貢献したいのかを書き連ねました。それを読んだ担任の先生から、これほどの気持ちがあるのなら指揮者をやってみないかという打診を受けたのです。自分にできるのかどうか不安でしたが、「指揮者」という特別な役割への興味には勝てませんでした。

その後、僕は指揮者となり、紆余曲折あったものの、合唱コンクールでは優秀賞を獲得することができました。合唱を通してクラスが一つにまとまって

いくのを感じ、クラスメイトからたくさんの感謝や労いの言葉をもらった経験は、努力によって得られる達成感と大きな自信を与えてくれました。

そこで、今年の四月、僕はクラスの副会長に立候補しました。少しでもクラスメイトと関わるきっかけになればいいと思ったからです。副会長に選ばれたときは、誰かに言わずにはいられないほどの自信が湧いてきて、自分はここから変わるのだと強く心に決めました。

副会長になった今、クラスに友達がいらないという状況に変わりはありません。けれども、変化はありました。もっとも大きな変化は、行動することによって、自分の思いを行動に移す勇気を得たことです。その結果、クラスメイトからは「何かすごい奴」として認めてもらえるようになりました。

これまでに、現状を変えたいと思ったことは、きっと皆さんにもあったらと思います。しかし、変えたいと思うだけで行動しなかったこともあるのではないのでしょうか。何かを変えるためには、行動するしかありません。周りに変化が現れないこともあるけれど、自分の中には、確実に何か大きな変化が現れます。クラスに友達がいらない現状が変わらなくても、こうやって皆さんの前で目を見て話している自分は、これまでの自分ではありません。

休み時間、楽しみに話すクラスメイトの横で、一人で本を読む自分は、「不幸な奴」ではありません。「何かすごい奴」なのです。行動することの影響力を信じて、皆さんも思いを行動に変えてみませんか。

後悔しないために。「今」できること

津幡町立津幡南中学校 3年 谷口 歩



「習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格に気をつけなさい、それは、いつか運命になるから。」これはマザーテレサが残した言葉の一部です。普段の言葉や習慣を一度立ち止まってみて、振り返ろうと思わせられる言葉です。

私は、この言葉が好きで座右の銘としていつも心に留めています。ネガティブで落ち込んでしまうと、前向きではない考え方をしてしまう私は、そのせいで、友達に嫌な思いをさせてしまい関係が悪くなる時があります。そのようなときに、この言葉を思い出すようにしています。習慣となっている行動を見直してみると、自分がなぜそのような気持ちや態度になってしまったのか、次から何を気をつけないといけないのか、気づかされます。そして、「自分の考え方を変えなくちゃいけない。」とポジティブな考え方をすることができるようになります。

私は、日々の生活で「今」に視点をおき未来につながるような考え方をしたいと思っています。この先、毎日たくさんの悩みや、課題、将来の不安なことで落ち込んでしまったとしても、今すべき大切なことは何かを、シンプルに考えて行動していきたいです。そのために意識していることが三つあります。

一つ目は、笑顔でいることです。私は以前、部活動の試合で対戦相手に追い込まれたとき、焦ってしまい、自分のテンションもどんどん下がってしまったことがありました。その時はマイナスなことしか考えられず、ペアを組んでいる仲間に嫌な思いをさせてしまい、とても後悔しました。この時から私は、いつも笑顔でいるように心がけました。そうすると、落ち込んでいても無意識に「がんばろう」そんなポジティブな気持ちになることができました。また、ペアの仲間からも笑顔で「大丈夫だよ」と言ってもらえると、とても心強い気持ちになります。そして「このままじゃだめだ。」と切り替えることができました。

二つ目は時間の使い方を変えることです。みなさんは、夜、一日を振り返ってみた時に充実していたと感じることができていますか。私は休日や部活がない日に家にいると何もせず、「休みの日ぐらいいは…」と思ってダラダラ過ごしてしまいます。しかし、友達の中で、学校や部活、習い事など友達との時間

を上手に使っている子がいます。その友達の行動から、学校の宿題や生活をしていく上で時間をコントロールしないといけないと気づかされました。その友達から時間をうまく使えるポイントを聞いてみると、今日することを決めていることとスキマ時間を有効活用することの二つを教えてもらいました。こうすることで、時間がある人もない人も一日を無駄なく過ごすことができ、その日の中でできることが増えるのではないのでしょうか。

私はつい楽なほうに逃げてしまいがちです。「これは、本当に今しなくてはいけないのか」と私もやることに優先順位をつけることで、時間の使い方を意識するようになりました。

三つ目に意識していることは、相手に伝えるときの言葉を意識することです。言葉の言い方や伝え方で相手への印象がプラスにもマイナスにもなります。私は、よく母に、言葉足らずと言われます。みなさんも、言葉が足りなくて相手に伝わらなかったことはありませんか。私は二年生の時、保育園に職場体験に行きました。その時に、小さい子に物事を伝える難しさを体験しました。小さい子にはわかりやすい言葉で、簡潔に伝えることが大切です。これは、私達にも同じことが言えます。

仲の良い友達などではキーワードだけで会話をしてしまい、伝えたいことが伝わらず、よく誤解が生まれます。私は伝えたいことを明確にして話すことを意識しています。しかし、頭でわかっていても実際はうまく伝えることができていない時が多いです。その時は、「もしかしたら伝え方が悪かったのかもしれない。言い方はおかしくなかったかな。」と自分自身の言葉や態度を振り返ってみることを心掛けています。

みなさんは、自分の中で大切にしている言葉はありますか。ぜひみなさんも自分の格言となるような言葉を見つけてみてください。きっと、時間や気持ちに余裕が生まれて、今よりもっと楽しい学校生活が送れると思います。

私も、自分を見つめ直しながら、人とのつながりや新しい考え方にもつながることができるよう、これからもこの三つを意識して生活することを続けていきます。



「多様性の尊重」この言葉は、TVでも教室でもよく耳にします。「全ての人に画一的な価値観や考えを押し付けない」という意味だと思いますが、この言葉を耳にするたびに、私は心が苦しくなるのです。他人の多様性を尊重する前に、まず私はありのままの自分自身を尊重できているのだろうか。

小学生の頃、私は授業でよく挙手をしていました。自分の意見をクラスメイトが真剣に受け止めてくれることが大きな喜びとなり、自信をもって授業に臨んでいました。中学生になっても、私は自分を素直に表現できていました。そんな中行われた、初めての定期テスト。私は好成績に恵まれ、その噂は瞬く間に学年中に広がりました。その結果、同級生から「賢い人」と捉えられるようになったのです。

それからしばらく経った、ある日の数学の授業。一次式に関する基本的な問題を尋ねられた時です。「 $3x + 1$ 」一瞬にして教室内が静まり返るのを感じました。解答を誤ってしまったのです。「こんな簡単な問題をまさか間違えるなんてありえない。」「賢いはずなのに、どうして間違えるの。」「顔から火が出るくらい恥ずかしいのに逃げ場が見当たらず、立ち尽くすしかない私にクラスメイトが冷たい視線を浴びせてきます。とてもとても長い時間のよう感じられました。

このことがきっかけで、私の言動は一変しました。日々の授業での挙手はもちろん、人前に出て話すことをためらうようになり、友達ですら近寄りがたい雰囲気をつくるようになったのです。

ありのままの自分でいたいのにいられない。そんな日々が続き、3年生となったある日、私はこの言葉と出会いました。「もっと自分を出していいんだよ。」四月に赴任された担任の先生は初めての面談の際、こう仰ってくださいました。「失敗を恐れず、

自分を素直に出していいんだ。ありのままの自分であっていいんだ。」と温かく背中を押され、自信がみなぎるのを覚えました。

それ以来、授業での発言の機会が徐々に増え、自分の意見をクラスメイトに伝える喜びを再び感じられるようになっていきました。そうして、本当の自分を隠さないようになってからは、運動会の応援団のリーダーに立候補したり、今まで関わりの少なかった同級生に話しかけたりと様々なことに挑戦しています。些細なことかもしれませんが、私には大きな一歩です。

多様性を尊重することは現代社会において必要です。そのような社会の実現は、地球規模で物事を見る視点をもちながらも、まず私たち一人一人が身の回りの人を大切に、そもそも自分自身を大切にすることから始まると信じます。自分自身と真摯に向き合い、ありのままの自分でいられることこそが肝心なことなのです。

あなたは、自分を大切にできていますか。本当の自分でいられていますか。小さなことで構いませぬ。ありのままの自分を尊重しましょう。誰もが自分らしくいられる世界を実現するために。



あなたは、戦争についてどのような思いをもっていますか。また、あなたにとって「幸せ」とはなんですか。

毎日のようにニュースや新聞で見るロシアとウクライナの戦争。しかし、ニュースを見ても「かわいそう」「辛そう」と、一時的にそう思うだけの人が大半でしょう。私も祖母の話を書く前までは、そう思っていました。

私の祖母は、太平洋戦争が始まった1941年に、富山市で生まれました。戦時中のことはまだ幼かったため、あまり覚えていないのですが、唯一記憶に残っていることは、夜は部屋を暗くし、すぐ逃げられるように玄関の戸を開けて寝ていたこと、そして、空襲警報が鳴り、外を見ると見えきれないほどのB29が空一面に赤色のランプを光らせ、飛んでいる様子だったそうです。祖母は、その光景が今でも忘れられないと言っています。

当時、富山市には軍事用品を造っている工場があって、その工場に爆弾を落とされると聞き、幼かった祖母は母と一緒に石川県に疎開してきました。疎開した後も生活は苦しく、配給でお米をもらっても、とても少ない量でした。そのため、きなこや煮干し、さつまいもなどを混ぜて食べていたそうです。

戦争が終わったころ、祖母は両親から戦時中に起きたこと話を聞いたそうです。疎開したあと富山では爆弾が落とされ、火の熱さに耐えられず、人が川に飛び込んで亡くなり、たくさんの遺体が浮いていたこと。祖母の父は「騎兵」という馬に乗って戦う兵士で、その馬を大事にかわいがっており、寒い日や敵から逃げて野原に寝るときは、馬がおなかに抱えて温めてくれたこと。そして、日本が戦争に負け、馬を置いてこなければいけなくなったとき、最後の別れでは、馬が大粒の涙を流したこと。

私はこれらの話を聞いたとき戦争への怖さや悲しさを知ることができ、改めて今、この時間が「幸せ」だということに気づきました。毎日おいしいご飯を食べることができて、毎日学校に通えて、毎日家族

や友達がそばにいてくれて…。いつも当たり前を感じていることが、実は当たり前ではなく、一瞬でなくなってしまうことだってあるということ。特に大きな出来事もなく、何気なく過ぎていく平凡な一日でも、それが私の「日常の幸せ」だということ。祖母の体験談は、私にこれから先の人生の生き方・考え方を教えてくれたような気がしました。

世界では、今も戦争で多くの人たちが犠牲になっています。空爆や食料不足で亡くなった人、それらによって家族を失ってしまった人…。今この瞬間も苦しんでいる人がいます。そんな人たちがいるということを、皆さん忘れないでください。日本には戦争を経験したことのある人がいます。しかし、年を取っていき、亡くなられる人も徐々に増えていくことでしょう。そうした方が一人もいないという時代がいずれ訪れるのかもしれませんが、それでも私は、日本で起こった戦争のことを後世に伝えていき、命の大切さや平和であることの素晴らしさを、これから生まれてくる子たちにも知ってほしいと思います。そのためには、今を生きる私たちが戦争について深く学び、深く知ることが大切です。

「日本は戦争をしないから。」

「昔のことだから。」

そう思っている人もいると思います。しかし、みんなに必ずしも平和な明日があるとは限りません。食料がある暮らしがどれだけ幸せか、戦争のない暮らしがどれだけ幸せか。一年後も十年後もその先も、私は戦争について伝えていきたいと思います。

今戦争で苦しんでいる人たちに、一日でも早い平和と希望と幸せを。そして、あなたに「日常」という名の幸せを。



あなたは、もし自分の意見や好きなものが、周りの人と違っていても、恐れずに皆に言えるだろうか。僕は、人に合わせるという行動は、他と違う自分への、恐怖の表れなのではないかと、考えている。

中学生になって、僕は自分を出せなくなった。何かを選ぶときは、多い方に合わせたり、将来の夢はバカにされないように「普通」のものにしたりと、とにかく周りに同調していた。そこには、「浮きたくない」「否定されたくない」という、無数の不安があった。でも、「普通」であることは、自分を見失っていくようで、辛かった。

そんな僕に変わる勇気をくれたのは、他でもない自分自身だった。

小学五年生のとき、将来の夢を発表する機会があった。それも、全校生徒の前で、だ。当時の同級生は、サッカー選手なんかの「夢らしい夢」を語らなくなり、公務員とばかり答えていた。そんな中で、「医者になって、もし新しいコロナウイルスが出たら、人々を救うワクチンを作りたい」こう、言い飛ばした。

今の僕には、包み隠さず自分の思いを語るなんて、到底できない。でも、そのときの僕にためらいは一切なく、ただ言い終わった後の清々しさを噛みしめていた。

「前にできたんだから、今でもきっと！」僕は強く思い、それが、行動する力になった。

持っていくのに抵抗があった、奇抜なデザインの水筒を手提げ、学校へ行ってみた。「何か言われるかも」と、覚悟を決めていた、そのとき。「その水筒、イケてんな！」友達が一言、こう言ったのだ。瞬間、今までの悩みは、吹き飛んでいった。

周りからは、小さな出来事に見えるかもしれない。でも、僕にとっては、とてつもなく大きな、大きな一歩だった。

思い返せば、意外と簡単なことだ。多分、今どきの中学生には、考え過ぎる癖がついているのだろう。人と違う行動にはリスクはつきもので、「認めてもらえないかも」などと、考えるうちにやめてし

まう。でも、それは、自分の予測に過ぎない。やってみないうちは、結果は誰にも分からないのだ。その上、自分のありのままを言うただけで、激しい後悔に襲われたりはしない。むしろ、「文句言ってろ、これが『僕』なんだ！」くらいに割り切ってしまう。実際、医者話をした後、会場内にマイナスな感情なんて一切感じなかった。

もしあなたが今、「人に合わせてばかりで、苦しい」と感じているのなら、些細なことでもいい。「私はこっちがいいな」と尝试してみるのも、逆に、「それは嫌だな」と尝试してみてもいい。ちょっとした会話の中にだって、チャンスはある。勇気を出して、「普通」から一歩、踏み出してはみてはどうだろうか。

「普通」の反対は、「特別」だ。優秀な人とかに使われがちな、プラスイメージの言葉だ。

今、世の中では、「過剰同調性」と言って、周りに合わせようとするあまり、ストレスを感じ過ぎて鬱になったり、体調不良になって仕事に行けなくなったりする人が増えている、というデータがある。そんな世の中だからこそ、気づいてほしい。人と違う自分は、「特別」な、素敵な自分であるということ。

人と違うことを、恐れる必要はない。あなたの周りにいる人達は、きっとそれを理解してくれる。だから、ただ漠然と「普通」に埋もれるのではなく、ありのままの自分を大切にすべきだ。

恐れずに、隠さずに、勇気を出して見せてみよう。本物の、そして「特別」な、あなたの姿を。



今や、浸透しきっていると言っても過言ではない。——SNSの話である。私も毎日のように利用している。

毎日のように利用する私が、いつもいつも目にするものがある。「誹謗中傷」だ。私は芸能人やネットの活動者が好きで、よく動画を観たり情報を調べたりしている。コメント欄には「かつこいい」「大好き」などの温かいものもあるが、「やめてほしい」「きもい」などの、見た本人が傷つくようなものもたくさんある。見ている私も傷つき悲しくなるが、それ以上に、怒りが込みあがってくる。

誰もがダメだとわかっているはずなのに、なぜするのか。自分がされる側になると傷ついたり怒ったりするだろうに、どうしてする側に立つことができるのか。どうしてわざわざそんなことを書き込むのか。それを見た人の気持ちは考えないのか。私は不思議でしかなく、たくさんの疑問と、行き場のない怒りが膨れ上がる。

以前の私は、こんなに怒っていなかった。誹謗中傷に関するニュースを見ても「気の毒だな」とは思ったが、それ以上の感情になることはなく、引きずることもなかった。あんなことが起きるまでは。

私の元に流れてきた、ある芸能人が自ら命を絶ったというニュース。言葉は出ず、動きは止まり、ほどなくして涙がこぼれた。それは、私が推していた人だったからだ。

言葉の恐ろしさを実感すると同時に、深い後悔が押し寄せてきた。コメント欄が荒れているのは気付いていた。にもかかわらず、私は何もしなかった。もしあの時、何か励ましのコメントを残していたら。流れを止めるための拡散をしていたら……。何度思ったかわからない。

どれくらいの間、その後悔に苦しんだかわからない。しかもその後悔が合っているのかわからない。そもそも後悔したところで、過去は変わらないし、変えられない。

そこで私は思ったのだ。この後悔を活かしてやろう。過去は変えられないが、未来は変えられる。同

じ過ちは繰り返さない。心に誓った。

言葉によって困っている人、苦しんでいる人、言葉によって助けたい。励ましの言葉を、言われてうれしい言葉を使っていこう。それはネットだけでなく、現実でも。

誰かの言葉で救われた経験がある人は数多くいるだろう。私もそのうちの一人だ。言葉で、人を笑顔にしたい。

荒れたり燃えたりは割とどこにでも起きることに気付くようになった。些細な失敗で、ちょっとした会話の流れやノリで、棘のある言葉がつながりやすい空気になる。

またすぐに、別の活動者の動画のコメント欄に心無い言葉を見つけてしまった。背筋が冷えて、怒りが沸いてきたが、私はそこにかぶせるように「ずっと応援しているよ」的なコメントをつけてみた。すると後日、そのコメントにたくさんのいいねがついていた。私のコメントに共感してくれる人がたくさんいる。そこからコメ欄の流れも少し良くなっていた気がする。

また、そのいいねをくれた人の中には本人もいた。私のコメントが本人の目に留まったということだ。私の言葉で、少しでも本人を勇気づけられたかもしれない。あの時やらなくて後悔したことを、今私は実践できている、と感じて、自然と口角が上がった。

一人ひとりが自分の言葉に責任を持ち、視野を広く、相手の気持ちを考えることが大切なんだと思う。言葉は、私たちが想像しているよりも強く鋭い。言葉によって笑顔になる人もいれば、傷つく人もいる。私は笑顔があふれる世界がいい。傷つく人がいない世界がいい。私はこれからも誰かの力になれるよう、励ましの言葉を伝えていく。



「あの人はこんな人だよ」噂話だけで話したこともない人を決めつけて、あまり関わろうとしないこと、ないでしょうか？みんなに嫌われなくて、他人に合わせて過ごすこと、ないでしょうか？

今からお話する物語は、素の自分を出せなかった私を変えてくれた友達との小さな物語です。

ある夏の日、いつものように登校してきた私に、ある友達が「あの、感じの悪い変わった人だよ」と話しかけてきました。「そうだよね」ただ合わせるように言っていました。その日から私は、“感じの悪い変わった人”と言われた彼のことを避けるようになりました。合わせないと、自分が嫌われると思ったからです。

1年が過ぎた、ある夏の日。私は別の友達と遊ぶことになり、その友達のもとに行くと、そこにはあの“感じの悪い”と言われた彼もいました。どうやら二人が先に約束していたらしく、そこに後から私が参加する形になったようです。

私は今まで極力彼と関わらないようにしていたため、最初は空気が重く、気まずい雰囲気でしたが、遊んでいくうちに少しずつ話すようになっていき、その日のうちに彼の趣味だけでなく優しさや勇気を知ることができました。

その日をきっかけに、よく三人で遊ぶようになり、そのうち二人で遊ぶようにもなり、私たちは親友と呼べるほど仲良くなっていました。

それでも、二人で出かけた時、学校の同級生の姿を見つけた時には、私は彼と一緒にいるところを見られてはならないと、隠れることもありました。私は、自分が嫌われなくて、また自分を守ってしまったのです。

私は彼に聞いてみました。「なんで学校ではあんな冷たくて無口なん？」そしたら彼は「無理に自分と違う自分を作りたくない。全員に好かれることは無理なんだから、変に自分を作って苦しみたくない。せっかくの自分の人生、自分らしくないと損じゃない？」

その言葉を聞いてはっとしました。自分の人生の

主役は自分なんだから、偽りの自分を作って好かれようとするなんて人生の無駄遣いだと気付かされたのです。「俺っていう人生の視聴者は俺だけだ。だったら、俺が続きを見たいような物語じゃないと意味がないだろう」——ルパン三世の言葉です。人に合わせて自分の物語をつまらないものにしたくない！と、心から思いました。

それから私は、胸を張って自分らしくいることにしました。彼と過ごすことを隠すようなことはせず、周りの考えに合わせてことなく自分の思う意見を正直に言うように、その場のノリに合わせて流されることなく嫌なことは断るように、自分の気持ちに正直に過ごすようにしています。

不思議と、それで周りに嫌われることはありませんでした。自分だけが変な気の使い方をして、周りのことも信頼せず、ただ自分で自分を苦しめていたのかもしれない。いろいろ抱えていた悩みが少しずつ減って、身が軽くなっていきました。素の自分を出しても、みんなは認めてくれるということに、すごく安心しました。

彼が勇気をくれたから、私は今の素の自分でいれます。彼とは今でも仲良く過ごしています。一緒に遊んだり、互いの誕生日を祝い合ったり、悩みを相談したり、1月1日に起きた地震で水が使えなかったときは、彼が家まで水を届けてくれたりもしました。

嫌われることを恐れずに生きていく、とよく言いますが、意外と嫌われません。私は相手に合わせないとだめだと思っていましたが、人と人はそんなに冷たい関係ではありません。きっと素の自分を認めてくれると思います。私がそうだったように、すこしの勇気を出してみることで今抱えている問題は大きく変化するかもしれません。

この物語は、人に合わせてばかりいた私が、彼の言葉で勇気をもらい、自分らしくいられるように変わった、私と親友との大きな物語です。

審査委員講評

石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長 東原 修身



今年度の本大会は、台風接近の影響により、皆さんが一堂に会して開催することができませんでした。が、動画審査という形で開催されたことは大変嬉しく思います。

ビデオ映像であっても、十六名全員の発表から、それぞれの主張がしっかりと伝わってきました。自然災害、人権問題、自分の個性など、様々なことに自分自身の経験を通して向き合い、現在どのように行動しているのか、また、これからどのように行動していきたいのかを堂々と発表する姿に大変感心しました。

さて、現在はVUCA（ブーカ）の時代だといわれています。VUCAとは、変動性（Volatility）、不確実性（Uncertainty）、複雑性（Complexity）、曖昧性（Ambiguity）の頭文字を取った言葉であり、「予測困難で不確実、複雑で曖昧な状態」を意味します。世界規模での新型コロナウイルス感染症、国外での戦争、国内での能登半島地震や水害等の災害、またAIの急激な進化による科学技術の発展など、近年、私たちが経験している出来事が、VUCAの時代であることを物語っています。

このような時代を生きていく皆さんには、様々な問題に対して受け身にならず、自分自身と結び付けて考えながら、自分たちの手で持続可能な社会を築いていこうとする未来の社会の「創り手」となる力を身に付けることが求められています。

このような力を身に付けることは難しいだろうと思うかもしれません。しかし、皆さんが今回の少年の主張大会にチャレンジしたこと。そして、地区大会や県大会に向けて、自分自身の主張と向き合い続けてきた皆さんの思いや行動こそが、まさに社会の創り手となる生き方そのものです。今回の経験は、これからの人生の貴重な財産となり、必ずや自分を

高めていく宝物になると思います。

また、本大会では、皆さんの素晴らしい主張の中から、最優秀賞、優秀賞、奨励賞が選ばれることになります。大会結果は一つのゴールではありますが、決して最後のゴールではありません。自分自身の人生の中での一つのきっかけであり、もしかすると、このきっかけが今後、皆さんが歩む道のスタートになるかもしれません。明日からの毎日の中で、今回の主張を心の中にしっかり置き、この大会で発揮したチャレンジ精神や好奇心を大切に、何事にも自分なりの考えをもって行動することを持続してください。自分自身の人生を切り拓くと共に、社会の創り手として成長されることを心から期待しております。

最後に、子供たちにこのような成長の場を与えていただいた関係者の皆様、また本日まで丁寧にご指導いただいた先生方、そしていつでもそばで見守り、支えていらっしゃる保護者の皆様に感謝申し上げます。講評とさせていただきます。



令和6年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代における社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会	石川県小中学校長会
石川県PTA連合会	石川県子ども会連合会
明るい社会づくり運動いしかわ	石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟	

4 開催方法

動画による審査

5 審査期間

令和6年9月9日（月）～9月19日（木）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容

次に掲げる事項の中で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞）	1名
優 秀 賞（石川県教育委員会賞）	2名
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞）	13名

9 その他

- （1）発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。
- （2）最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすく、説得力のある話だったか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があつたか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えていたか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であつたか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持ち時間を5分とし、持ち時間を超過した場合はその時間の長さに応じて各審査委員の点数から減点する。（5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。）

審 査 委 員

(1) 審査委員長 吉田 克也 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 本山 充 (石川県小中学校長会 理事)

増野 裕之 (石川県PTA連合会 副会長)

中黒 公彦 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

縄 寛敏 (石川県子ども会連合会 会長)

東原 修身 (石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会(加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町)

「第43回 加賀地区中学生意見発表大会」

主 催 加賀地区市町教育委員会

共 催 石川県健民運動推進本部

日 時 令和6年8月3日(土) 13:00～

会 場 能美市根上総合文化会館 音楽ホール

審査員 二口英一郎(石川県教育委員会事務局小松教育事務所長)

山本 民夫(加南地区教育委員会連絡協議会長)

木下 浩明(能美市教育委員会教育長)

西河 志津(石川県教育委員会事務局小松教育事務所指導主事)

発表者(20名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
言葉の力	能美市立辰口中学校	3	山本 奏太
困難をプラスに	小松市立松陽中学校	3	山本 凜音
外国人差別を生まないために	小松市立国府中学校	3	北野 恵史可
未来への想い	加賀市立錦城中学校	3	川原 綺莉
若いからこそ	小松市立安宅中学校	3	中村 達基
情熱が生み出す力	加賀市立錦城中学校	3	永田 葵羅
自分を見つめ続ける	能美市立根上中学校	3	中西 絆
集団の中での個人の力	小松市立芦城中学校	3	瀧坂 朔矢
地震との向き合い方	加賀市立片山津中学校	3	小酒 愛菜
読書のよさ	小松市立板津中学校	3	森中 ことみ
私にできる第一歩	小松市立松東みどり学園	9	谷口 蒼
今に生きる私達の生き方	川北町立川北中学校	3	和田 清良
光と影との共存	加賀市立東和中学校	3	中出 愛梨
平和のためにできること	小松市立中海中学校	3	作元 愛
世界中の平和	小松市立南部中学校	3	中野 瑠七
より良い行動を	加賀市立片山津中学校	3	田辺 紗由羽
「誇り」	加賀市立東和中学校	3	板東 功真
衣料廃棄物と私たち	小松市立御幸中学校	3	近藤 日峰
「明日」に向かって	能美市立寺井中学校	3	上田 久遠
未来を見つめて	小松市立丸内中学校	3	吉田 美優

(2) 石川中央地区大会（かほく市、白山市、野々市市、河北郡）

「第34回（令和6年度）少年の主張石川中央地区大会」

主 催 石川県 石川県健民運動推進本部

共 催 かほく市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日 時 令和6年8月3日（土）13：30～

会 場 西田幾多郎記念哲学館

審査委員 山越 充（かほく市教育委員会教育長）

広橋 陵（石川県河北郡市校長会 津幡町立津幡南中学校教頭）

水口 政美（白山市PTA連合会副会長）

輿石 奈央（石川県教育委員会事務局金沢教育事務所指導主事）

宮崎 禮子（石川県青少年育成アドバイザー協会会長）

発表者（15名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
タイパ	白山市立笠間中学校	3	田中 来実
人に寄り添うということ	白山市立美川中学校	3	坂尾 玲奈
丸ごと受け入れて	白山市立美川中学校	3	荒屋 知咲登
当たり前ではない日常	野々市市立野々市中学校	3	皆田 果凜
障害者の人権	内灘町立内灘中学校	3	山本 羽咲
2020年12月1日	白山市立松任中学校	3	カルキ スバサナ
命のバトン	白山市立笠間中学校	3	津田 祐那
BRAVE	白山市立鳥越中学校	3	梶 つばき
ありのままの自分	かほく市立高松中学校	3	大多 遼
支える	白山市立北星中学校	3	安部 爽夏
後悔しないために。「今」できること	津幡町立津幡南中学校	3	谷口 歩
当たり前じゃない毎日	白山市立光野中学校	1	田井 美紗希
打ち込めるものの素晴らしさ	野々市市立布水中学校	3	横山 晃太郎
みんなの代表	野々市市立布水中学校	3	嶋田 連音
暖かい空気	白山市立光野中学校	3	吉村 夏希

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第77回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主 催 金沢市教育委員会、金沢市中学校文化連盟弁論部

日 時 令和6年8月9日（金）13：00～

会 場 教育プラザ富樫 121・122 研修室

審査員 二見 和男（NHK金沢放送局キャスター）

金沢市内各中学校国語科教諭 等

発表者（25名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
吉と出るか凶と出るか	金沢市立泉中学校	3	神社 咲耶
あたりまえだと思っていたこと	金沢市立兼六中学校	3	鳥羽 碧
自分の意見を聞いてもらうために	金沢市立城南中学校	3	北嶋 葉月
“今日を生きる君へ”	金沢市立高岡中学校	3	村本 詩歩
運についての考え方	金沢市立医王山中学校	1	中川 幹太
努力	県立金沢錦丘中学校	3	松田 絵梨子
「あたりまえの錯覚」	金沢市立野田中学校	3	溝上 絢菜
私達の作る社会～アンコンシャス・バイアスを超えて～	北陸学院中学校	3	前田 美穂
つなぐ～願いのバトン～	金沢市立金石中学校	3	黒崎 環奈
友達との関わり	金沢市立芝原中学校	3	上田 真理愛
過疎化を止めるには	金沢市立港中学校	3	宮脇 愁也
和のころと私たち	金沢市立北鳴中学校	3	生地 薫
自分の弱さと向き合って	金沢市立大徳中学校	3	高畑 幸依
「お役」	金沢市立紫錦台中学校	3	岡田 実樹
能登半島地震	金沢市立額中学校	3	滝埜 雅依
夢を叶えるための夢	金沢市立森本中学校	3	山元 叶望
差別は作られる	金沢市立高尾台中学校	3	駒寄 乃愛
ルールの存在意義について	金沢市立清泉中学校	3	坪内 京香
悩みとどう向き合うか	金沢市立鳴和中学校	3	齋藤 里穂
どうして勉強するのか	金沢市立犀生中学校	3	馬場 結楽
海を越えた架け橋	金沢市立長町中学校	2	北野 はな
ヘルプマークって知ってる？	金沢市立浅野川中学校	3	村田 絢花
行動することの意味	金沢市立西南部中学校	3	中野 瑛斗
自分と未来を生きる次世代のために	金沢市立緑中学校	3	喜多 彩奈
僕の挑戦	金沢市立長田中学校	3	長濱 智斗

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第56回少年の主張能登地区大会」

主 催 第56回少年の主張能登地区大会実行委員会、七尾市教育委員会

共 催 石川県健民運動推進本部

日 時 令和6年8月4日（日） 13：30～

会 場 七尾市立七尾中学校 1階 階段教室

審査委員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

布川かほる（石川県教育委員会事務局中能登教育事務所指導課長）

湊口登志子（七尾市中学校文化連盟会長）

寺口 茂美（七尾市学校教育研究会 国語科教育研究会会長）

水谷内良郎（中能登町立中能登中学校長）

奥原 真弥（七尾市教育委員会学校教育課長）

発表者（9名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
性別という鎖	七尾市立七尾中学校	1	永江 千紘
あたりまえと「あたりまえ」	七尾市立中島中学校	2	加賀 理暖
日常という名の幸せ	中能登町立中能登中学校	3	笠間 絵吏
言葉に込めた気持ち	七尾市立七尾東部中学校	3	金村 美羽
自分らしさ	七尾市立七尾東部中学校	3	村本 大我
私にしか描けないもの	七尾市立能登香島中学校	3	櫻井 綾乃
理想像からの解放	七尾市立中島中学校	3	室木 心海
「普通」が阻む、「特別」な自分	中能登町立中能登中学校	2	瀧口 蒼太
日常の大切さ	七尾市立七尾中学校	2	浅田 恋奈

一隅を照らす

宮城県 栗原市立栗原南中学校 3年 ケイバー・ジーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？
この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで三十五年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学四年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」

「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、四年生からは、日本で生活しています。

六年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかった。ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」そう思うことが何度もありました。どうしようもなく泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができてることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ話、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で(يوكونج روښانه کړئ)。(ユウコンジ・ロシナヘ・クリェ)。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

石川県生活環境部女性活躍・県民協働課内

TEL 076-225-1366 FAX 076-225-1374

ホームページ【健民運動】で検索

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp